高齢者との接触経験が若者の高齢者像の生成に及ぼす影響に関する日韓比較

Comparison of Effects of South Korean and Japanese Young People's Experiences of Contact with Elderly People on Generation of Impressions Regarding Elderly People

畔津　忠博、金　恵媛、吉永　敦征
山口県立大学国際文化学部
Tadahiro Azetsu, Hyeweon Kim, Nobuyuki Yoshinaga
Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

要旨：
本稿は、若者が抱く高齢者像とその生成に至る背景ついて議論する。日本と韓国の大学生にアンケート調査を行い、SD法を用いて高齢者像を取得し、同時に高齢者との同居経験や高齢者への世話経験についても併せて確認した。同居経験・世話経験を2要因とする分散分析をSD法の各質問項目に適用した結果、交互作用が認められた質問項目がいくつかあった。また、日本では同居経験がある場合にさらに世話経験を行うことによって、質問項目の評価が肯定的に変化する傾向がみられたが、韓国ではあまり変化がみられなかった。

Abstract:
In this paper, we discuss about young people's perceptions regarding elderly people and the background of generating processes of their perceptions. A questionnaire survey was conducted on university students in South Korea and Japan, and their impressions regarding elderly people were acquired using the semantic differential （SD） method. In the questionnaire, a living together experience with an elderly person and a caring experience for an elderly person were also confirmed. As a result of applying the two-way analysis of variance （ANOVA） with the factors “living together“ and “caring” experiences to each term used in the SD method, significant differences in interaction were observed in several terms. In addition, in the case of Japan, it was found that many terms in the SD method changed to positive evaluations by adding the “caring” experience to the “living together” experience, whereas there was not much change in South Korea.

キーワード: 高齢者像の生成、接触経験、日韓比較、大学生、SD法
Key words: Generation of impressions regarding elderly people, Contact experience, Comparison between South Korea and Japan, University students, Semantic differential method

1　はじめに

本研究では、若者を対象として、高齢者との接触経験（同居経験及び世話経験）が高齢者像の生成に及ぼす影響について検討する。

使用するデータは、日韓の大学生を対象に実施したアンケート調査の結果である。以前に筆者らは同調査の結果を使用して、大学生が抱く高齢者イメージの特徴について日韓比較検討を行い報告した（畔津・金・吉永、2017）。そこでは、SD法を用いた高齢者像、具体的にイメージする高齢者の例、高齢者に対する普遍的な考え方等の結果を示した。

本稿では、高齢者像を生成する要因、背景について考察を行う。具体的には、SD法の各質問項目の評価値により取得された高齢者像が、同居や世話といった高齢者との接触経験の有無により、どのように変化するかを考察する。

2　先行研究

高齢者像の生成と高齢者との接触の関係については（大谷・松木、1995；今井・片岡・柳田、1998；竹田・太湯、2002）に注目した。先行研究の結果をみると、若者の高齢者像は祖父母など想像できる身近な存在の有無、家族関係（祖父母と親の関係）、交流頻度などによって影響を受ける。この傾向は大学生より中学生においてより強く表れるが、対人関係の範囲によるところが大きいものと見受けられる。中学生の場合、対人関係として家族の比重が大きく、結果的に祖父母という具体的な高齢者の特徴、祖父母との交流関係といった直接的な刺激が一般的な高齢者像を判断する材料となっていると考えられる。小学生を対象とした調査でも同様の指摘が確認できる。高齢者との交流頻度を高めることが、肯定的な高齢者像を維持するために重要であることが言及されている（藤原・渡辺・西 他：2007）。

高齢者との接触経験については、同居経験だけでは高齢者イメージへの明確な影響は図りにくく、高齢者との交流の量と質が影響しているという知見が得られている（竹田・太湯、2002：165）。大学生においても同居経験だけでは高齢者像にあまり変化がなく、祖父母との会話や高齢者の世話経験など、高齢者との積極的な交流経験が肯定的な高齢者像につながることが指摘されている（大谷・松木、1995：33）。

3　調査概要

大学生が抱く高齢者像を調査することを目的として、日本の1つの大学と韓国の2つの大学で、2016年6月にアンケート調査を行った（畔津・金・吉永、2017）。対象者は、日本の大学では312名、韓国の大学では2つの大学でそれぞれ200名、100名であり、日本と韓国で合計612名から調査協力が得られた。

アンケートは匿名で行い、日本では日本語で、韓国では韓国語で作成された質問内容に、15分程度の時間で回答してもらい、その場で回収した。項目によって未回答のものもあったが、すべての回答者の結果を用いた。なお、本調査では、堀の調査票（堀・大谷、1995）を参考にして、アンケート項目の策定を行った。

4　祖父母との接触経験の高齢者像への影響

4-1　SD法による高齢者像の取得

以下の5段階の尺度をもつSD法を用いて34個の質問項目により高齢者像の調査を行った。下記は一部であり、すべての質問項目は表8（p.71）に示す。

あなたは「老人」についてどのようなイメージをお持ちですか。以下の項目を見て、あなたの老人イメージに該当するところに○を付けてください。

①非常にそう思う ②まあまあそう思う
③どちらともいえない ④まあまあそう思う
⑤非常にそう思う

	①	②	③	④	⑤	
消極的						積極的
尊敬できない						尊敬できる
経験が少ない						経験が多い

4-2 高齢者との同居経験

高齢者との同居経験の有無については、次の質問により調査した[1]。

老人と同居した経験はありますか？ 下の中の該当する番号を書いてください。同居経験がある場合には、その期間について書いてください。

・祖父母と一緒に住んだ経験(　)
①経験がある/住んでいる（期間: ___年程度）
②経験がない

結果を表1に示す。

表1. 日韓における祖父母との同居経験の有無

	日本	韓国
同居経験あり	127 (41.2%)	116 (40.3%)
同居経験なし	181 (58.8%)	172 (59.7%)
合計*	308	288
* 未回答の日本 4 件、韓国 12 件は除く。		

両国とも同居経験は40%程度であり、類似した割合となった。また、平均同居年数は日本10.4年、韓国8.6年であった。

1　同様の方法で、親戚の老人、それ以外の老人についての同居経験も調査した。ただし、親戚の老人との同居経験は日本で3人、韓国で2人、それ以外の老人との同居経験は日本で0人、韓国で2人と少数であったため、今回は祖父母との同居経験のみを対象とする。

4-3　高齢者の世話経験

世話経験の有無については、次の質問により調査した[2]。

あなたがお世話をしたことがある方について○をつけてください。お世話の内容について書いてください。（複数回答）

* 世話の内容: ①日常のまわりの世話 ②病気の看護 ③食事または入浴介助 ④排泄介助

対象	経験	内容
祖父母	ある( ) ない( )	①( ) ②( ) ③( ) ④( )

結果を表2に示す。

表2. 日韓における祖父母の世話経験の有無

	日本	韓国
世話経験あり	93 (30.7%)	91 (31.6%)
世話経験なし	210 (69.3%)	197 (68.4%)
合計*	303	288
* 未回答の日本９件、韓国 12 件は除く。		

両国とも世話経験は30%程度であり、これも類似した割合となった。また、世話経験について、負担の軽重により2つのグループに分類した。その結果は表3の通りである。

表3. 世話経験の詳細

	日本	韓国
日常の周りの世話のみ	57	48
「病気の看護」、「食事または入浴介助」、「排泄介助」のいずれかを経験	34	40
未回答	2	3

日常の周りの世話以外の経験をしている人が、両国とも一定の割合で存在した。

2　同様の方法で、親戚の老人、それ以外の老人についての世話経験も調査した。親戚の老人の世話経験は日本で16人、韓国で6人、それ以外の老人の世話経験は日本で37人、韓国で44人であった。それ以外の老人の世話経験が多いのは、大学の実習等の関係が考えられる。また、今回は同居経験、世話経験だけでなく、それらの関係性についても議論するので、世話経験でも祖父母のみを対象とする。

4-4 同居経験と世話経験の関係

同居経験の有無と世話経験の有無について、日本と韓国のそれぞれでクロス集計を行った。結果を表4、表5に示す。

表4. 同居経験と世話経験（日本）

日本	世話経験あり	世話経験なし
同居経験あり*	49	77
同居経験なし**	43	133
* 世話経験についての未回答１人を除く。 ** 世話経験についての未回答５人を除く。		

表5. 同居経験と世話経験（韓国）

韓国	世話経験あり	世話経験なし
同居経験あり*	58	56
同居経験なし**	30	135
* 世話経験についての未回答２人を除く。 ** 世話経験についての未回答７人を除く。		

日本では世話経験がある場合、同居経験の有無でそれほど違いがない。また、同居経験があっても世話経験がない場合も多い。韓国では世話経験がある場合、同居経験ありの方が多い。両国の共通する点として、同居、世話経験ともになしの人数が多く、高齢者との接点が少ないことがわかる。

さらに、同居経験の有無と世話経験の詳細についてもクロス集計を行った。結果を表6、表7に示す。

表6. 同居経験と世話経験詳細（日本）

日本*	同居経験あり	同居経験なし
日常の周りの世話のみ	28	28
「病気の看護」、「食事または入浴介助」、「排泄介助」のいずれかを経験	20	14
* 世話経験の詳細についての未回答 2 人、同居経験についての未回答１人を除く。		

表7. 同居経験と世話経験詳細（韓国）

韓国*	同居経験あり	同居経験なし
日常の周りの世話のみ	29	17
「病気の看護」、「食事または入浴介助」、「排泄介助」のいずれかを経験	26	13
* 世話経験の詳細についての未回答 3 人、同居経験についての未回答 3 人を除く。		

日本では日常の周りの世話のみ行う場合は、同居経験のあり、なしで同数となっており、比較的負担の軽い世話経験は同居経験にあまり依存していない。韓国では世話経験がある場合は、同居経験も伴う傾向がある。

4-5　同居・世話経験が高齢者像に与える影響

以上のように、両国とも祖父母に関しての同居・世話経験については、いくつかのパターンが存在し、高齢者との接触経験に違いがある。この違いが高齢者像に影響を与えることも考えられる。すなわち、同居経験や世話経験、あるいは2つの経験の相互作用により、高齢者像が肯定的あるいは否定的に変化する可能性もある。

そこで、同居経験及び世話経験を2要因とする分散分析をSD法の各質問項目に適用して、その影響を調べた。Leveneの等分散性の検定により等分散性が仮定できる質問項目における分散分析の結果を表8に示す。なお、分析には、SPSS 24.0を用いた。

4-5-1　日本の場合

日本では「暇だ-忙しい」（F（1,298）=4.447, p<0.05）、「弱い-強い」（F（1,298）=4.671, p<0.05）、「非生産的-生産的」（F（1,297）=7.379, p<0.01）で有意な交互作用が認められた。これらを図1（a）、（b）、（c）に示す。さらに、交互作用が認められた項目で単純主効果の検定を行った結果、同居経験ありにおける世話経験の有無で、日本の「暇だ-忙しい」（F（1,298）=5.613, p<0.05）、「弱い-強い」（F（1,298）=4.192, p<0.05）、「非生産的-生産的」（F（1,297）=7.197, p<0.01）のいずれも有意差があった。加えて「非生産的-生産的」では、世話経験ありにおける同居経験の有無でも有意差が認められた（F（1,297）=5.899, p<0.05）。

また、表8に示す通り、同居経験の有無で有意な主効果が認められた項目は、「依存的-自立的」（F（1,298）=3.995, p<0.05）で、世話経験の有無で有意な主効果が認められた項目は、「好ましくない-好ましい」（F（1,298）=5.555, p<0.05）、「間抜けだ-賢明だ」（F（1,298）=11.198, p<0.01）であった。

4-5-2　韓国の場合

韓国では「孤立-連帯」（F（1,274）=3.958, p<0.05）で有意な交互作用が認められた。これを図1（d）に示す。ただし、このとき単純主効果において有意差が認められる項目はなかった。

また、同居経験の有無で有意な主効果が認められた項目は、「弱い-強い」（F（1,275）=5.948, p<0.05）、「遅い-速い」（F（1,275）=4.071, p<0.05）で、世話経験の有無で有意な主効果が認められた項目は、「単純だ-複雑だ」（F（1,274）=4.644, p<0.05）であった。さらに、「厳しい-優しい」では、同居経験の有無（F（1,275）=3.938, p<0.05）と世話経験の有無（F（1,275）=5.602, p<0.05）の両方で有意な主効果が認められた。

4-5-3　日韓の比較

今回、日本における交互作用の結果から、同居経験ありにおける世話経験の有無で特徴的な結果が得られたため、この条件におけるSD法全体のグラフを図2、図3に示す。この図より、日本において、同居経験ありで世話経験が伴うと、全体的にSD法の各質問項目の評価値が肯定的に変化することがわかる。一方、韓国では「単純だ-複雑だ」のように肯定的に変化しているものもあるが、全体的な傾向としては、変化はあまりなかった。

5　おわりに

本研究では、日本と韓国の大学生を対象として、高齢者との同居経験及び高齢者への世話経験が高齢者像の生成にどのように影響を及ぼすかについて調査した。

同居経験と世話経験を2要因とし分散分析を行った結果、交互作用で有意差が認めれた質問項目があった。また、日本において同居経験に世話経験が加わると、SD法による高齢者像が肯定的に変化する傾向がみられた。

表8. 高齢者像（SD法の各質問項目）の結果

質問項目	日本					韓国				
	人数	等分散性	同居	世話	同居*世話	人数	等分散性	同居	世話	同居*世話
消極的 - 積極的	301	0.730	0.639	0.745	0.770	279	0.456	0.155	0.586	0.461
尊敬できない - 尊敬できる	302	0.623	0.252	0.443	0.401	279	0.616	0.058	0.754	0.516
経験が少ない - 経験が多い	301	0.541	0.682	0.603	0.700	279	0.128	0.406	0.116	0.891
活発だ - 静かだ	302	0.994	0.054	0.467	0.438	278	0.128	0.601	0.813	0.971
保守的 - 進歩的	302	0.343	0.727	0.666	0.345	278	0.822	0.919	0.475	0.846
むなしい - 充実している	301	0.347	0.815	0.385	0.186	277	0.935	0.469	0.914	0.914
好ましくない - 好ましい	302	0.845	0.370	0.019 *	0.116	279	0.784	0.349	0.207	0.546
悲しい - 嬉しい	302	0.031 *				279	0.441	0.344	0.974	0.897
灰色 - バラ色	301	0.013 *				279	0.939	0.256	0.588	0.866
暇だ - 忙しい	302	0.958	0.676	0.191	0.036 *	279	0.184	0.389	0.170	0.118
依存的 - 自立的	302	0.303	0.047 *	0.491	0.239	279	0.893	0.637	0.460	0.760
間抜けだ - 賢明だ	302	0.905	0.245	0.001 **	0.466	279	0.587	0.141	0.901	0.142
受動的 - 能動的	302	0.726	0.445	0.394	0.329	279	0.285	0.485	0.764	0.355
暗い - 明るい	302	0.573	0.267	0.460	0.386	279	0.370	0.733	0.382	0.399
主観的 - 客観的	302	0.194	0.096	0.284	0.191	279	0.017 *			
弱い - 強い	302	0.767	0.834	0.429	0.031 *	279	0.376	0.015 *	0.874	0.874
否定的 - 肯定的	302	0.143	0.969	0.371	0.136	279	0.859	0.277	0.895	0.990
非生産的 - 生産的	301	0.062	0.200	0.247	0.007 **	279	0.146	0.164	0.985	0.856
貪欲だ - 淡泊だ	302	0.616	0.318	0.415	0.547	279	0.748	0.124	0.188	0.978
感情的 - 理性的	302	0.587	0.763	0.591	0.715	279	0.615	0.270	0.829	0.808
下品だ - 上品だ	302	0.037 *				279	0.974	0.330	0.892	0.304
頑固だ - 従順だ	302	0.966	0.763	0.437	0.437	279	0.080	0.644	0.262	0.535
不幸だ - 幸せだ	302	0.809	0.471	0.943	0.277	279	0.555	0.504	0.996	0.402
無愛想 - 愛嬌がある	302	0.747	0.099	0.490	0.130	279	0.062	0.208	0.984	0.657
単純だ - 複雑だ	302	0.127	0.726	0.465	0.983	278	0.658	0.998	0.032 *	0.581
きたない - きれいだ	302	0.180	0.335	0.522	0.518	279	0.308	0.929	0.812	0.533
貧しい - 裕福だ	302	0.588	0.247	0.731	0.954	279	0.296	0.813	0.555	0.273
孤立 - 連帯	302	0.692	0.738	0.357	0.449	278	0.287	0.699	0.477	0.048 *
遅い - 速い	302	0.561	0.811	0.521	0.494	279	0.380	0.045 *	0.960	0.850
厳しい - 優しい	302	0.499	0.450	0.929	0.072	279	0.873	0.048 *	0.019 *	0.808
傲慢だ - 謙虚だ	302	0.065	0.891	0.397	0.678	279	0.622	0.409	0.557	0.650
悲観的 - 楽観的	302	0.180	0.729	0.396	0.233	279	0.267	0.448	0.934	0.357
無能だ - 有能だ	302	0.586	0.476	0.785	0.468	279	0.359	0.562	0.316	0.430
閉鎖的 - 開放的	302	0.219	0.198	0.836	0.052	279	0.624	0.541	0.144	0.150

（注）人数以外はp値を表す。*は$p < 0.05$、**は$p < 0.01$であることを示す。

図1. 交互作用が認められた項目。（a）「暇だ-忙しい」（日本）、（b）「弱い-強い」（日本）、（c）「非生産的-生産的」（日本）、（d）「孤立-連帯」（韓国）。誤差バーは標準誤差。

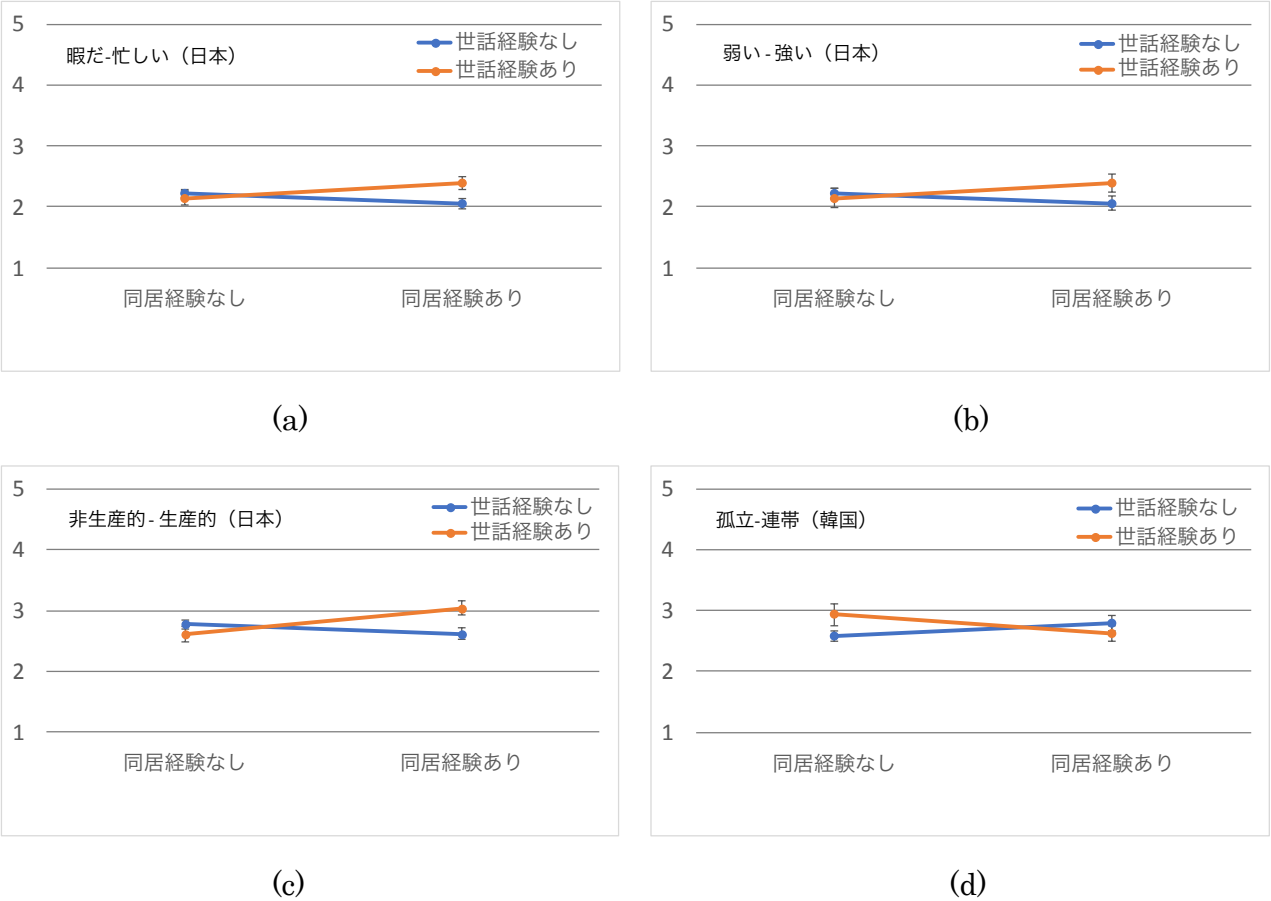


図2. 同居経験ありで世話経験の有無におけるSD法の結果（日本）

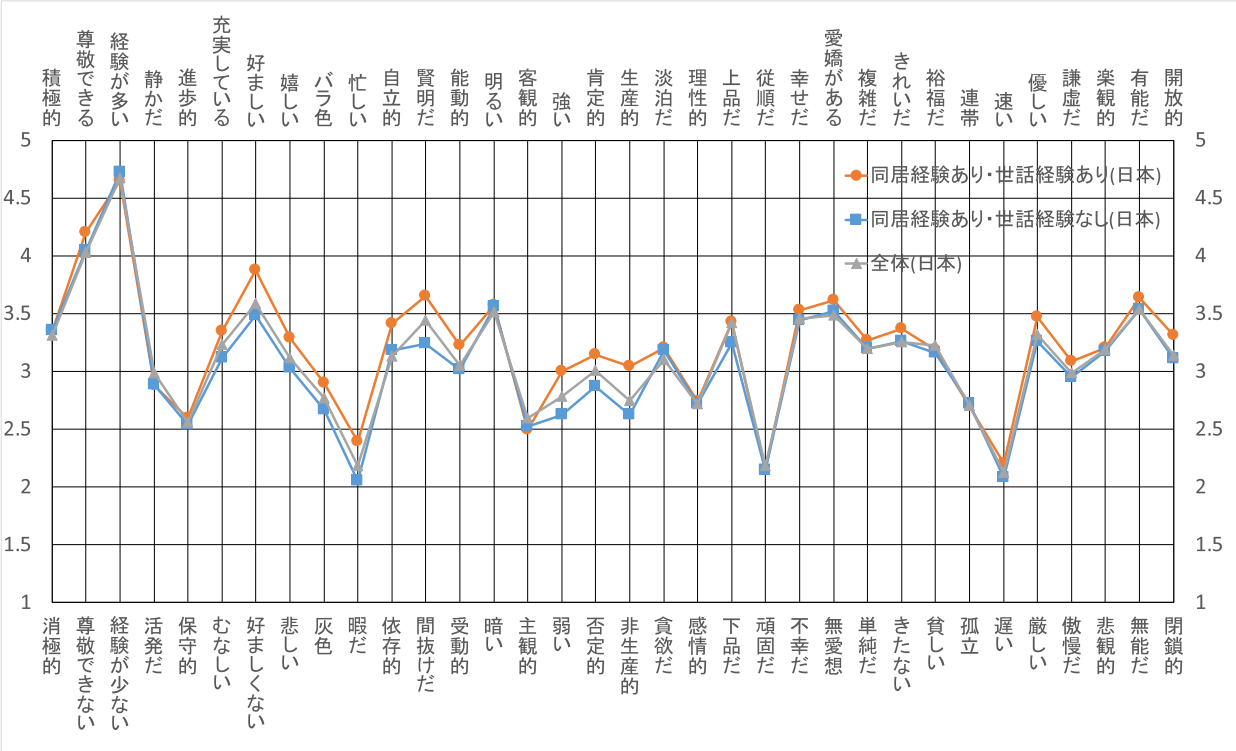
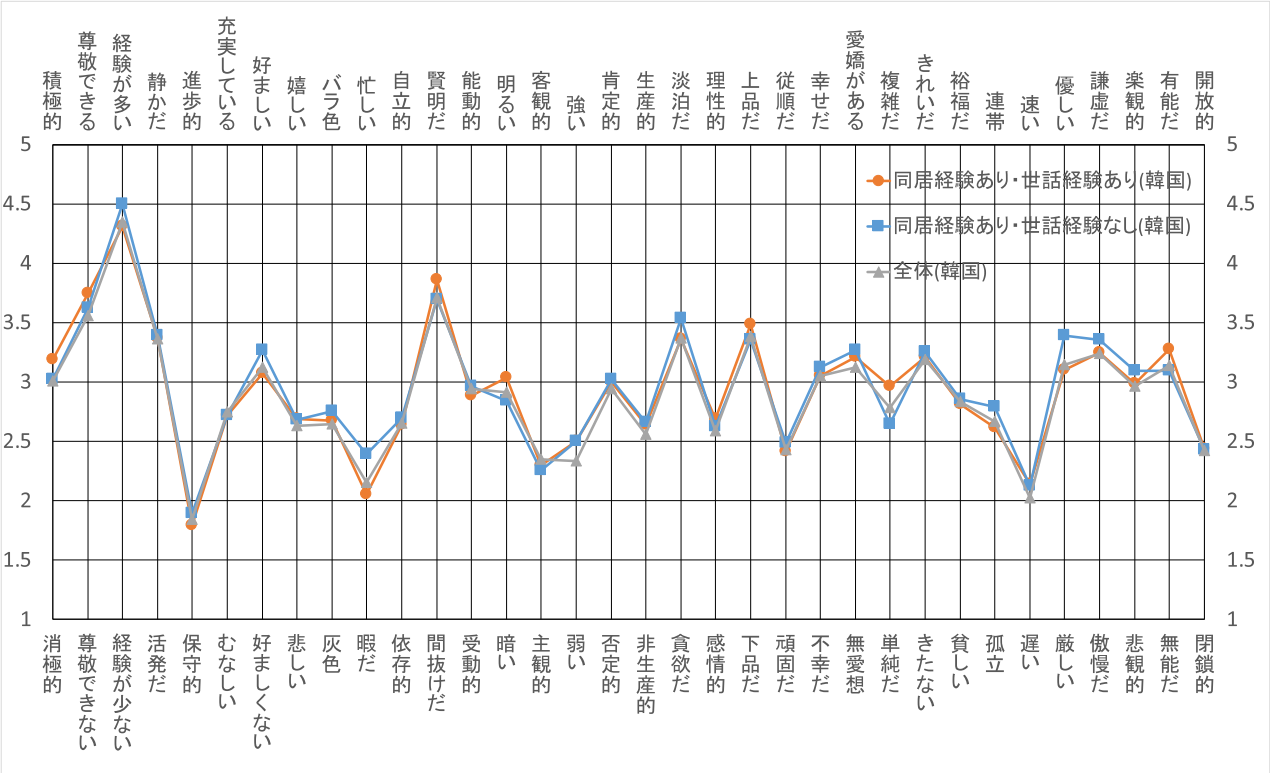


図3. 同居経験ありで世話経験の有無におけるSD法の結果（韓国）



先行研究においては、祖父母との会話や高齢者の世話経験によって高齢者像が肯定的になる傾向が指摘されていたが、本研究による日韓比較では、日本では同様の傾向がみられたが、韓国では異なっていた。このことは、両国において異なる文化的な背景要因により生じた可能性があり、今後考察していく。

大学生も含め一般的に、同居率の低下や地域コミュニティの矮小化、デジタルメディアの使用など日常において高齢者との接触頻度が低下傾向にある。狭い範囲内での高齢者との交流経験が高齢者像に影響を及ぼすことが今後予想され、継続的に検討する必要がある。

謝　辞

本研究の調査にご協力をいただきました韓国と日本の学生の皆様，関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、JSPS科研費（15K01882）の助成を受けて実施した研究の一部を取りまとめたものです。

参考文献

[1]畔津忠博・金恵媛・吉永敦征、2017、「大学生が抱く高齢者イメージに関する日韓比較― 多主体間の長寿文化共有の試み ―」、『山口県立大学学術情報　高等教育センター紀要』1：pp. 123-130

[2]大谷英子・松木光子、1995、「老人イメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の老人イメージと生活経験の関連」、『日本看護研究学会雑誌』18（4）：pp. 25-38

[3]今井雪香・片岡万里・柳田泰義、1998、「老人イメージに関する調査（2）－看護大学生と一般大学生との比較－」、『神戸大学発達科学部研究紀要』6（1）：pp. 225-233

[4]竹田恵子・太湯好子、2002、「中学生の老人イメージとその形成に関連する要因」、『川崎医療福祉学会誌』12（1）：pp. 161-167

[5]藤原佳典、渡辺直紀、西真理子 他、「児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 “REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から」、『日本公衆衛生雑誌』54（9）：pp. 615-625

[6]堀薫夫・大谷英子、1995、「老人イメージに関する調査研究－生涯教育の視点から－」『大阪教育大学生涯教育計画論研究室』、http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/ handle/123456789/4204